

聖書箇所：ルカの福音書 6章 35～38節

説教題：さばいてはいけません

## 1 さばいてしまう自分

先週に引き続き、今日の箇所にも私たちがよく知っているみことばが登場します。特に37節の「さばいてはいけません。そうすれば、自分もさばかれません」は特に有名です。人間関係に大きな問題が起き、相手を憎んでしまうようなことが起きたとき、このみことばを持ち出し、親切に警告する方もおります。人から言われなくても、相手を感情的になってさばいてはいけないことは頭ではわかっているつもりです。しかし、いつも言うことですが、わかっていることと実際にそのようにできるのかはまた別ことです。多くの方が、誰かをさばいてしまうことで悩んでおります。いったいどうしたら、人をさばかずに済むようになるのかと考えるのですが、いつもうまくいきません。

## 2 まるで鏡のように

37, 38節を読みます。「さばいてはいけません。そうすれば、さばかれません。人を罪に定めてはいけません。そうすれば、自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。」

ここを読んでいると鏡を思い出します。鏡の前に立って、口を開ければ、鏡の中の自分も口を開ける。口を閉じれば、鏡の中の自分も口を閉じる。いずれも、まず自分がやらなければ、鏡の中の自分は行動しません。それと同じように、まずあなたが最初に人の罪を

赦しなさい。そうすれば神は、まるで鏡のようにしてあなたの罪を赦してあげますよ。そんな内容に聞こえます。しかし、さばいてはいけないと知っただけで、どうしてもさばいている自分がいることを知って苦しんでいます。

イエスは、できない私たちを責め立てるためにこのようなことを語るはずはありません。むしろ反対に、私たちの苦しみを知ってください、その苦しみを取り去るために語ってくださいているはずですよ。どうことなのか。次にその事を考えます。

## 3 恩知らずの悪人

### (1) 人と人

ヒントは35節後半、36節にあります。「なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」

イエスが私たちに、「さばいてはいけません」とか「赦しなさい」と言われるのは、天の父なる神が恩知らずの悪人にもあわれみ深いからなのだというのです。「恩知らずの悪人」とは誰のことでしょうか。また、その恩知らずの悪人は、どれほどひどい者なのでしょう。

神のことをいきなり考えてもぴんと来ません。私たちの身近で経験する例を考えてみましょう。自分がほかの人に対して腹を立てるような場合です。例えば、侮辱されたら腹

が立ちます。顔を殴られてもそうです。財布や大事なものを盗まれたら腹が立ちます。まだまだたくさん挙げればきりがありません。しかし一方、いつまでも腹を立てているわけにもまいりません。というのは、腹を立てるのにも大変なエネルギーが必要で、怒ってばかりいると疲れてくるからです。なので遅かれ早かれ、なんとか怒りの矛先を納め、自分なりに納得しなければならなくなります。

「財布を盗まれたのは自分が悪かったからだ。お金がなくなっただけで、いのちが取られたわけではないのだから、不幸中の幸いと思うことにしよう。」そんなふうになんて思え、忘れようと思えます。

しかし、貸したお金を返してくれないとなったらどうでしょう。それもかなりまとまった金額という場合です。とても、納得はできません。運が悪かったからなどとは言えません。「あのとき、困っていると言うので貸してやったのに、返す期日が来ても返す気もない。なんとやっつだ。」この恨みは忘れようと言っても忘れるものではありません。相手を信頼したのに裏切られました。そのことをなんとも思い出し、そのたびに腹を立て、悔しい思いをします。「恩知らずの悪人」と怒鳴りたくなります。お金のこととなると、一円でもきちんと取り返さなければ気が済まない私たちがいます。

## (2) 神と人

神はどうでしょうか。神からご覧になって、恩知らずの悪人とは誰のことでしょう。お気づきのとおり、私たち人間です。神は私たちを土のちりから形づくってください、いのちを与えてください、私たちが生きるために必要ないっさいのものを与えてくださって

いました。でも私たちはその神に向かって何をしましたか。

この世界に神などいないと言ってきました。この世界を造られた神ではない、ほかの神々を拜んできました。自分が神になろうとがんばってきました。神なんかなくても、自分たちはうまくやっていけると考えていました。この世は、能力のある者こそ勝ち残る世界だと徹底的にたたき込まれ、弱い者を蹴落としてでも自分の幸せを守ろうとしていました。

私の友人と話したときのことですが、彼はこう言ったのです。「自分は神の存在はまだ信じられない。でも、能力という宗教はずっと信じて生きてきたかもしれない。この宗教は、バラ色の世界だけがあるかのような幻想をふりまき、自分の弱さや罪深かさを見ないようにさせる。」

人々は神なんかいないと口では言いながら、実際にやっていることを見ると、実は自分の能力を神として生きているのです。それが私たち人間の現実です。聖書の神がご覧になれば、私たちはまことに恩知らずの悪人と呼ばれても当然です。神からたくさんものをいただきながら、「そんなものもらった覚えはありません。目障りだから神様にはお引き取り願いましょう」と言っているようなものです。返すべき膨大な借金があるのに、ふんぞり返っているようなものです。まことに「恩知らずの悪人」です。

## 4 あわれみ深い天の父

### (1) まだよくかわかっていない

もし天の父なる神があわれみ深くなかったのなら、どうなっただしょう。自分が神の立場に立って見たらすぐにわかります。そん

な恩知らずには、腹を立てます。絶対に赦せません。愛することなどんでもありません。貸したものはきっちり返してもらおう。これが正義というものだ。なんなら裁判所に訴えて、きちんとさばいてもらって白黒はつきりつけましょう、と息巻きます。借金を返さずにふんぞり返っているようなやつは、地獄落ちればよいとさえ思うでしょう。もし私たちが神の立場なら、そう考えます。

しかし神はどうか。イエスは言われます。「いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。」この方は、相手がたとえどんな恩知らずの悪人であっても、貸したものを返してもらおうとは思いません。この方は、どんなにひどく侮辱をされ、どんなにひどく憎まれても、どんなにひどくからだを痛めつけられても、決して相手をさばくことはしないし、決して罪に定めることはなさいません。どこまでもどこまでも敵を愛し続けるお方なのです。

神は愛の方である。神があわれみ深い方である。私たちは何度も聞いてきました。そんなことは知っています。しかし、本当にわかっていたのでしょうか。実は、ひとりひとり頭の中で勝手に想像していたのです。「神はこれくらいまでは大目に見てくれるかもしれないけれど、でもここまでやったら絶対に赦してくれない。」そんなふうにはめて、神のあわれみを小さなものにしていただけではないか。

(2) だから、気がつくようにと

最初、「さばいてはいけません」と言われても、そうできない自分がいて悲しくなりました。責められているようにも思っていました。そうではありません。

イエスは神がどれほどあわれみ深い方であるかを正しく教えるために、あえてこんな言い方をされていたのです。私たちは、他人の話は熱心に聞きませんが、自分のこととなると誰に言われなくても真剣に考えるという習性をもっています。それでこんな言い方をします。「皆さん、自分の敵を愛してみてください。愛せますか。皆さん、ほかの人をさばかないでいられますか。皆さん、貸したお金は返してもらわなくても結構ですと心から思えますか。自分にひどいことをした人を赦せますか。」そんなふうにして私たちの心に問いかけます。

この問いかけに、私たちはどう応答するでしょう。「努力して人を愛せるようになれば」と言うのでしょうか。悪いことは言いません。あきらめたほうがよい。イエスはそのような答えを求めているのではありません。イエスは私たちに気がついていてもらいたいだけなのです。私たち人間には絶対にできないということを。絶対にできないとわかったとき、神はその反対にそこまで恩知らずの悪人にあわれみ深いお方なのだと気がつく。まるで鏡で逆さまに映し出すようにして、イエスは語っておられます。

## 5 量り返してもらおう

最後に 38 節について触れておきます。人間同士、相手を量り、また相手から量られるという関係が述べられています。でも人と人との間にとどまることではありません。これを、神と人との関係に置きかえることもできます。神がどれだけあわれみ深い方なのか、私たちはそれぞれに心の中に神のあわれみを量る量りを持っていると考えてみましょう。ある人はこれくらい、また別の人はこれ

くらい。人それぞれ量が違います。「あなたがたは人を量る量りで、量り返してもらうからです。」

神はそれほどあわれみ深いとは思えない。もしそう考えるなら、神からのあわれみは小さくしか感じられません。でも、神は想像もつかないほどあわれみ深い方であるとわかるなら、神はそのとおりにあわれみを注いでくださいます。

誤解のないように言いますが、だからと言って、罪の赦しがこの人には小さく、この人には大きいというようなことを言っているわけではありません。罪の赦しも、神のあわれみもどんな人にも等しく注いでくださいます。

違うのは、私たちの受け止め方だということです。どんな人にも同じ量のあわれみを注いでくださるのに、私たちの受けとめる量が小さければ、多くは外にこぼれ落ちてしまいます。自分の量が小さいことに気がつかずに、「私には神のあわれみは少ない」と嘆きます。

けれども今度は逆に、私たちの受けとめる量が大きければどうなるでしょう。神のあわれみを豊かに実感することができます。

ここまで聞いて、皆さんはいま疑問に思っているかもしれない。「どうしたら量りを大きくすることができるのか、それが知りたい。」

イエスはきちんと教えておられます。

「あなたがたはさばいてはいけませんと、わたしは言います。でも、あなたがたはできますか。」

あなたがたは赦しなさいと、わたしは言います。でも、あなたがたはできますか。

できないでしょう。であれば、できない自

分を見つめなさい。鏡に自分の姿を映し出さなさい。そこに何が見えますか。見たくない自分ですか。確かに本当の姿を見るのはつらいでしょう。でもよく見てください。

鏡の中に映る人の姿が左右逆になるように、できない自分を鏡に映し出すとき、神はその正反対のことをしてくださるのです。「私にはできません」と言うあなたに、神は恵みをあなたに注いでくださることを見るようになるのです。」

厳しく聞こえた主の御声でしたが、実は私たちにあわれみを注ぐためであったことに気がつきます。

弱さを恵みに変えてくださる主の御名をあがめます。